

ハイライフアンケート調査結果を読む 第四回

男女の生活意識に大きなギャップが…。 離婚予備軍の大きな存在が見え隠れしている

2011年2月23日

■執筆: マーケット・プレイス・オフィス代表 立澤芳男(たつざわよしお)

■流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案/都市・消費・世代に関するマーケティングの情報収集と分析

■現ハイライフ研究所主任研究員/クレディセゾンアドバイザー

■元「アクロス」編集長(パルコ)/著書「百万人の時代」(高木書房)ほか

ハイライフ研究所が実施した「都市生活者調査」(2010年10月実施)の結果を元に、既存データも活用し現在の生活者の生活価値観や生活行動の実際を見ます。

新連載シリーズ第四回では、大きく異なる男性と女性の生活意識・価値観がテーマです。

昨今では、婚活ブームが盛り上がっているが、「結婚について希望が持てない」と言う独身者は後を絶たない。結婚に関わる損得を否が応でも考えさせられる情報が世の中に溢れすぎているため、「結婚=幸せ」という既存観念を信じ込むことができない。そしてその理想と現実のギャップは、既婚者の間にも生じている。

離婚件数はこの10年間は毎年25万組を超え、数字上では婚姻した夫婦の約3分の1が離婚に至っている。些細な価値観の相違から夫婦がいがみ合うようになり、互いに一步も譲らず、家庭内別居状態に陥り、話し合っても相手に気持ちが通じなくなる。その溝は気づかぬうちに修復不可能なレベルまで広がってしまう。しかし、デキチャッタ婚があればデキチャッタ離婚もあるという。俳優やタレントの結婚・離婚の話題は尽きない。

タイガーウッズの離婚慰謝料は600億円だというのが、有名人の離婚では慰謝料が「何千万円」「何億円」というとんでもない額になっており、離婚は稼げるなどという風潮も出てきた。

従来の結婚像が失われた社会で人々が右往左往している状態を「ロス婚」(ロスコン=Lost Marriage)と呼ぶそうだが、今日の日本はそのロス婚社会といっても良い。男女それぞれが現社会状況をどう受止めているのか、将来に対してどのような考え方を持っているか。男女の生活意識ギャップを追った。

第4回 都市生活者の生活意識/分析レポート目次

男女の生活意識に大きなギャップが…。

1. 世の中の「平等」に対する男女の意識のギャップを見る……………p.2
 2. 今の社会で肯定する事柄についての男女の意識ギャップを見る…p.4
 3. ストレスの原因や心配事に関する男女のギャップを見る……………p.6
 4. 関心ある情報分野に関する男女のギャップを見る……………p.7
 5. こんなに違う日常生活(買物に対する意識)意識の違い……………p.9
 6. 「老後にしたいこと」の男女ギャップを見る……………p.10
 7. あなたが「よりどころ」とするものは何か? 男女ギャップ……………p.11
- ◇参考資料: 日本での最近の離婚状況 離婚肯定派が上回る時代になった……………p.13

執筆者メモ (p.17)

男女の生活意識に大きなギャップが・・・。 離婚予備軍を産み出す男女の生活感覚・意識の違い

多くの夫婦(既婚の男女)は生活をともにしながら、実は夫と妻は全く違う世界に生きている。断定はできないが、例えば妻が専業主婦の場合、夫が毎日体験する通勤ラッシュを実感できない。夫は食事の洗い物がどれほど腰に負担をかけるかわからない。妻は妻の友達を持ち、夫は夫でつきあいがある。互いに生活を一つにしながら、違った生活をしている。そのことは共働きの夫婦であったとしても同じ。別々の個人が互いに何かを出し合って、「夫婦」というスタイルを作っているわけだ。未婚の男女は生活意識や生活観ギャップはむしろお付き合いや結婚のきっかけとして好ましいものだが、しかし、夫婦となれば生活意識のギャップは、とんでもない結果を生む。

◆調査サンプル(未既婚) * 既婚には離死別含む			
	調査数	未 婚	既 婚
TOTAL	1800	31.1	68.9
男性 計	906	33.6	66.4
女性 計	894	28.5	71.5

意識ギャップは、例えば買物に対する行動や意識など日常的な生活場面でも多くみられる。その多面的に見られる男女の生活意識ギャップは、現実の日本社会では、「毎年約 25 万組という恒常的な離婚」として健在化しているようだ。幸せな結婚生活を夢見て夫婦になったはずが、いつの間にか地獄のような毎日。天国と地獄、それは死んだ後のあの世の話ではなくて、夫婦の間がまさに天国か地獄か、紙一重の世界がそこにある。未婚者男女にもギャップはあるものの夫婦の生活意識のギャップは「性格の不一致」ということで、結果として離婚につながる。なお巻末に「現在日本の離婚の現況」について整理してあるので参考にさせていただきたい。



1. 社会の「平等」に対する男女の意識のギャップを見る —男性より女性に強い世の中への「不平等」感

現代人は「平等」が何よりも優越するものとする考えが強い。全ての人間(万人)が、法的・政治的・経済的・社会的に公平・同等に扱われるようになることを志向する思想・信条・主張をよしとするわけだが、その考えに沿ってみれば今の世の中は平等でない社会なのだろう。

しかし、それなりの暮らしができるようになった現代社会では、平等という言葉は風化し始めて、時代の風・空気のようなものとなっている。それにしてもその「平等」とい言葉の受け止め方での男女のギャップは大きい。

1) 「平等」に対する男女の意識ギャップ

◆世の中は平等だと思うのか／男女別 (N=1800、男性:904、女性:896) 以下同

	平等だと思う	どちらかといえば平等だと思う	どちらかといえば不平等だと思う	不平等だと思う
男性	1.5	23.1	42.2	28.8
女性	0.7	15.3	51.6	26.2

- ・男女ともに「世の中は平等である」と言い切れる人はわずか 1%前後であるが、「不平等(どちらかといえばを含む)」は、男女ともに 70%を越える。
- ・男女別年齢別で「世の中は不平等」と答えた人が多いのは、女性では「20～24 歳」(82.3%)、男性で

は「35～49 歳」(77.2%)でいずれも現在の企業社会の中心世代である。

- ・男女のギャップを世代別見ると、若い世代ほどそのギャップ率は大きい、中年世代(35～49 歳)ではそのギャップは小さい。中高年という世代的に教育など共通の家庭生活問題を抱えているだけにその世代の男女の世の中の見方はそう変わらないことが見て取れる。

◆世の中は「不平等(やや不平等を含む)だ」と思う／男女別・年齢別

不平等だ	男性	女性	男女差
計	71.0	77.8	-6.8
13～19 歳	59.7	72.1	-12.4
20～34 歳	72.6	82.3	-9.7
35～49 歳	77.2	78.2	-1.0
50～64 歳	70.7	78.9	-8.2
65～74 歳	61.6	68.2	-6.6

2) 不平等だと思うものは何か

前の質問で「世の中は平等か手平等か」の度合いについて質問したが、7 割以上の方が「世の中は不平等」と答え、特に女性にその傾向が強いことがわかった。

それではその不平等と思われる「こと」とは何なのか。そこでの男女ギャップに注目してみた。

◆「不平等だと思うもの」の男女ギャップ(MA)

	男性	女性	男女差ポイント
・教育機会	28.5	35.7	7.2
・雇用や就職	53.6	59.6	6.0
・年金・健康保険など社会保障の負担と給付	63.6	67.9	4.3
・税負担と受ける行政サービスの質・量	51.8	56.0	4.2
・資産	29.5	26.1	3.4
・特に不平等だと思うものはない	8.4	5.8	2.6
・その他	0	0.2	0.2

- ・不平等だと強く意識している社会分野(こと)としては、男女ともに「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」「雇用や就職」「税負担と受ける行政サービスの質・量」をベスト3に上げている。しかもそれぞれ 60%前後となっており、現在の政治への関心度はここに焦点をあてられていることがわかる。しかし、この点に関しては男性より女性のほうが強く反応している。

- ・特に「男女ギャップ」が大きいのは「教育機会」と「雇用機会」である。年齢を重ねても技能や専門性を身につけて就職したいという女性の願いがかなわないというのが現実の日本社会なのだ。

- ・男女別年齢別で、男女ギャップを見ると

「20～34 歳」の年齢層では「雇用や就職」「教育機会」で女性の不平等感は男性より強く反応

「35～49 歳」の年齢層では、「教育機会」で男女ギャップが大きい。男性より女性が不平等を強く感じているようだ。母親として年齢的には中高生の教育に頭を悩ませる時期でもあるが、父親は無関心という家庭の構図が見て取れる

「50～64 歳」の年齢層では、不平等だと思っている分野はほとんど変わらないが、「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」「税負担と受ける行政サービスの質・量」の分野で男性よりかなりの不平等感を持っている。企業戦士として生活して世代である割には社会や企業が答えてくれていないと感じているのかもしれない

「65～74 歳」の年齢層になると受益世代になってきているため、男女ともに「年金や行政サービス」に不平等感を持っているが、男女のギャップはそれほど大きくない。

◆「不平等だと思うもの」の「男女別年齢別」ギャップ(MA) * **枠内の青数字は最低値、赤数字は最高値**

	年金・健康保険など社会保障の負担と給付	税負担と受ける行政サービスの質・量	雇用や就職	教育機会	資産	特に不平等だと思うものはない
男性	63.6	51.8	53.6	28.5	29.5	8.4
20～34 歳	59.8	44.3	56.6	23.4	34.4	9.8
35～49 歳	70.7	57.3	54.1	34.1	28.9	4.9
50～64 歳	69.4	62.1	58.2	28.9	28.9	6
65～74 歳	64.3	55.4	37.5	22.3	23.2	12.5
女性	67.9	56.0	59.6	35.7	26.1	5.8
20～34 歳	65.2	53.3	67.8	36.6	32.6	5.7
35～49 歳	67.5	55.1	56.8	43.6	26.3	3.7
50～64 歳	78.0	64.2	64.2	32.1	23.2	4.1
65～74 歳	69.1	60.0	38.2	28.2	18.2	10.



2. 今の社会について肯定する事柄についての男女の意識ギャップを見る

世の中は平等なのか不平等なのかという抽象的な問いかけに対して、約 7 割以上の人が不平等感を持つてしまう社会分野は、「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」「税負担と受ける行政サービスの質・量」であることが明らかになった。また、そこには男女のギャップや年齢のギャップが多々存在していることも確認できた。

それでは、具体的な現在進行している社会の事柄についてどのような認識を持っているのかを、またそこではどのような「男性と女性の意識ギャップ」を見ることができるのか。

今の社会について「肯定する事柄」を聞いてみたところ、肯定率が高い順に並べてみると

- ①「格差が広がっている」
- ②「人に対する気づかいが希薄になっている」
- ③「時間に追われる多忙な社会になっている」
- ④「老いるのがますます辛くなっている」
- ⑤「子どもを産み育てるのが難しくなっている」

となっており、このベスト5の事柄については、男女ともに8割以上の人が肯定している。

▼今の社会についての肯定する事柄について(MA)／男女別の認識項目

肯定(「そう思う」+「ややそう思う」の計)		男性	女性	男女のギャップ
①位	・今の社会は、格差が広がっている	86.7	88.8	2.1
②位	・今の社会は、人に対する気づかいが希薄になっている	85.0	85.7	0.7
③位	・今の社会は、時間に追われる多忙な社会になっている	79.7	82.8	3.1
④位	・今の社会は、老いるのがますます辛くなっている	78.0	82.9	4.9
⑤位	・今の社会は、子どもを産み育てるのが難しくなっている	77.6	82.3	4.7
6位	・今の社会は、夢や将来の展望が持ちにくくなっている	71.2	73.6	2.4
7位	・今の社会は、弱者が報われなくなっている	69.4	72.8	3.4
8位	・今の社会は、安全や安心にお金をかけるようになっている	69.0	64.4	-4.6
9位	・今の社会は、パソコンやケータイが使いこなせないと生きていけない	69.0	71.2	2.2
10位	・今の社会は、お金がすべての世の中になっている	68.8	68.7	-0.1
11位	・今の社会は、個々人の個性が失われている	55.0	52.9	-2.1
12位	・今の社会は、規則やルール優先で個人の自由が失われている	42.9	34.6	-8.3

- ・今の社会について肯定できるという事柄について、男女の認識に大きな差があるベスト3を見ると、第一位は「規則やルール優先で個人の自由が失われている」(ポイント差 8.3)、第2位は「老いるのがますます辛くなっている」(同 4.9)、第三位は「子どもを産み育てるのが難しくなっている」(同 4.7)となっている。
- ・「肯定できる」の事柄で、男女ギャップが大きい事柄を詳細に見ると、男性が女性よりもより肯定的に捉えている事柄は、「規則やルール優先で個人の自由が失われている」(女性より 8.3 ポイント上回る)と「安全や安心にお金をかけるようになっている」(同 4.5 ポイント)であり、女性が男性よりもより肯定的に捉えている事柄は、「老いるのがますます辛くなっている」(男性よりも 4.9 ポイント上回る)と「子どもを産み育てるのが難しくなっている」(同 4.7 ポイント)、「弱者が報われなくなっている」(同 3.4)、時間に追われる多忙な社会になっている」(同 3.1 ポイント)である

▼社会の「事柄」で男女ギャップが大きい事柄の上位(男女差ポイント3ポイント以上差)のある事柄

肯定的(「そう思う」+「ややそう思う」の計)	ポイント差	男性	女性	男女差
1位	・規則やルール優先で個人の自由が失われている	42.9	34.6	8.3
2位	・老いるのがますます辛くなっている	78.0	82.9	-4.9
3位	・子どもを産み育てるのが難しくなっている	77.6	82.3	-4.7
4位	・安全や安心にお金をかけるようになっている	69.0	64.4	4.6
5位	・弱者が報われなくなっている	69.4	72.8	-3.4
6位	・時間に追われる多忙な社会になっている	79.7	82.8	-3.1

ここでみられる男女ギャップが生じるのは、男性は家庭より企業などの社会で起こっている事柄や社会ルールなどの状況変化に影響されるが、女性は子供や身の回りの出来事など家庭内での事柄について大きく影響されていることに原因がありそうだ。ここで注目しておきたいのは、「老い」と「時間」に追われることに対しての女性のこだわりである。「美しいまま人生を自由に過ごしたい」という女性の想いは強烈である。

PART 3

3. ストレスの原因や心配事に関する男女のギャップを見る

世の中が平等かどうか、社会の事柄を肯定するかどうかについての考え方は、自分自身のことは別にして、一般人としてその問いかげに答えており、いわゆる一般的で平均的な世論調査結果と同様の回答を得ている。それはそれで整理してきたが、もう一步踏み込んで、より個人生活に密着した事柄での男女の生活意識のギャップの実態を深掘してみる必要がある。

ここでは、個人の「ストレスの原因や悩み」というプリミティブなテーマで男女の生活意識のギャップを見ることにする。個人各々のストレスや悩みは多種多様であるがそこには男女の意識ギャップは大きく横たわる。

①「ストレスの原因や心配事(MA)」男女別ランキング

・男女ともに「自分の健康」「老後や将来の不安」がトップ5に入っているが、どちらかといえば、男性は仕事関係の事柄、女性性は家庭関係における事柄で「ストレスや心配事」が大きい。

男性ランキング			女性ランキング		
1位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	49.6	1位	自分の健康	39.4
2位	自分の健康	35.9	2位	老後や将来の不安	38.5
3位	景気や生活費、収入が減る	33.9	3位	家族の健康や生活上の問題	37.0
4位	老後や将来の不安	31.9	4位	景気や生活費、収入が減る	35.3
5位	職場・学校・地域の人間関係	28.7	5位	貯蓄や資産の目減り	24.2
6位	家族の健康や生活上の問題	26.5	6位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	25.7
7位	貯蓄や資産の目減り	15.7	7位	職場・学校・地域の人間関係	24.0
8位	失業や倒産	10.9	8位	家庭内の人間関係	18.8
9位	家庭内の人間関係	10.5	9位	友人との人間関係	13.6
10位	友人との人間関係	7.5	10位	失業や倒産	5.9

②男女のギャップが大きい「ストレスの原因と心配事」のランキング

・「ストレスの原因や悩み」の中で、男女のギャップが大きい項目は、「仕事や学業のこと(人間関係以外)」「(男性の49.5%に対して女性は25.7%でそのギャップ差は23.9ポイントにもなる。続いて「家族の健康や生活上の問題」(女性の37.0%に対し男性は26.5%でそのギャップ差は10.5ポイントの差となっている。

		男性計	女性計	男女差ポイント
1位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	49.6	25.7	23.9
2位	家族の健康や生活上の問題	26.5	37.0	10.5
3位	貯蓄や資産の目減り	15.7	24.2	8.5
4位	家庭内の人間関係	10.5	18.8	8.3
5位	老後や将来の不安	31.9	38.5	6.6
6位	友人との人間関係	7.5	13.6	6.1
7位	失業や倒産	10.9	5.9	5.0
8位	職場・学校・地域の人間関係	28.7	24.0	4.7
9位	自分の健康	35.9	39.4	3.5
10位	景気や生活費、収入が減る	33.9	35.3	1.4

②年齢別・男女別で見る「ストレスの原因や心配事」に関する男女ギャップ(主要年齢層)

・年齢層別で男女のギャップを見ると、「35～49 歳」の年齢層においては、「ストレスの原因や心配事」が様々なことで意識ギャップが生じている。熟年に向かったのすりあわせが求められる年齢層になっている。

	20～34 歳			35～49 歳			50～64 歳		
	男性	女性	男女差 ポイント	男性	女性	男女差 ポイント	男性	女性	男女差 ポイント
自分の健康	24.2	30.4	6.2	29.3	33.3	4.0	48.3	49.6	1.3
家族の健康や生活上の問題	18.9	25.1	6.2	25.6	41.2	15.6	34.9	44.7	9.8
家庭内の人間関係	12.3	22.5	10.2	11.8	21.8	10.0	8.2	17.1	8.9
友人との人間関係	11.9	17.2	5.3	3.3	9.1	5.8	3.0	8.9	5.9
職場・学校・地域の人間関係	36.9	37.0	0.1	35.8	23.5	12.3	23.7	17.5	6.2
仕事や学業のこと(人間関係以外)	61.5	44.5	17.0	61.8	24.7	37.1	47.4	13.8	33.6
老後や将来の不安	23.8	26.0	2.2	26.4	36.6	10.2	47.8	50.8	3.0
景気や生活費、収入が減る	26.2	35.7	9.5	41.9	44.4	2.5	44.0	39.8	4.2
貯蓄や資産の目減り	13.1	18.1	5.0	13.8	28.4	14.6	22.0	31.3	9.3
失業や倒産	9.0	7.9	1.1	12.2	8.2	4.0	17.2	5.7	11.5

PART 4

4. 関心ある情報分野に関する男女のギャップを見る

個人のストレスの原因や心配事について聞いてみたが年齢別にも男女のギャップは存在していることが確認できたが、それら個別の悩みや心配事は当人の関心分野とリンクする。今日は情報社会といわれる時代であり、マスコミ、インターネットなど通じて多種多様に収集され、関心分野と思われる情報はどんどん拡大拡充されるようになってきた。関心ある情報分野についての相互理解は人間関係・夫婦関係の基本となりつつある。ここでは「情報」というキーワードから男女の関心度分野のギャップをみる。

◆男女別「関心のある情報分野」ギャップ(MA) 男女の関心分野ギャップランキング **再チェック!**

	男女差 ポイント	男女差		男女差 ポイント	男女差		
		男性	女性		男性	女性	
1位 美容	40.1	1.4	41.5	11位 食べ歩き・グルメ	17.2	18.9	36.1
2位 食べ物・料理	32.0	28.9	60.9	12位 住まい・インテリア	14.9	12.3	27.2
3位 スポーツ	31.0	54.4	23.4	13位 教育・育児	14.1	12.9	27.0
4位 ファッション	27.6	18.9	46.5	14位 医療	9.7	18.7	28.4
5位 経済・景気	25.4	59.3	33.9	15位 環境・エコ	7.9	13.6	21.5
6位 政治	23.8	49.3	25.5	16位 老後	7.4	16.8	24.2
7位 芸能	22.4	18.7	41.1	17位 新商品	6.6	21.5	28.1
8位 健康	19.3	31.3	50.6	18位 趣味	4.2	41.6	37.4
9位 企業・市場・ビジネス	18.2	25.9	7.7	19位 利殖・投資	2.0	5.1	3.1
10位 旅行	17.8	29.4	47.2	20位 地域再生	1.0	5.0	4.0

・関心のある情報分野で男女ギャップが最も大きいのは「美容」分野で、男女差は 40.1 ポイント、次いで「食べ物・料理」でそのギャップ差は 32 ポイントである。いずれも女性が男性を多く上回る。三位には

男性が女性を 31 ポイント上回る「スポーツ」分野である。

・「経済・景気」「政治」の分野は男性、「ファッション」「芸能」「健康」は女性がそれぞれ 20 ポイント以上の男女ギャップがみられる。

◆年齢層別「関心ある情報」分野について

	男性が女性を大きく上回る分野	女性が男性を大きく上回る分野	共通する関心ある情報分野 30%以上
20～34 歳	趣味、スポーツ、経済・景気、政治、企業・市場・ビジネス	ファッション、食べ物・料理、美容、芸能、旅行	新商品、ファッション、食べ物・料理
35～49 歳	スポーツ、経済・景気、政治、趣味、企業・市場・ビジネス	食べ物・料理、教育・育児、健康、ファッション、美容	経済・景気、
50～64 歳	経済・景気、政治、スポーツ、趣味、健康、	健康、食べ物・料理、旅行、食べ歩き・グルメ	経済・景気、政治、趣味、旅行、健康
65～74 歳	経済・景気、政治、健康、スポーツ、旅行	健康、食べ物・料理、老後、医療	経済・景気、政治、旅行、健康、医療、老後

◆年齢別男女別の「関心ある情報分野」の男女ギャップ

	20～34 歳		35～49 歳		50～64 歳		65～74 歳	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
政治	④39.8	18.5	③43.9	19.3	②61.2	32.5	②77.7	44.5
経済・景気	③46.7	28.6	②63.0	33.7	①69.4	④41.1	①79.5	44.5
企業・市場・ビジネス	⑤26.2	10.1	⑤31.3	7.4	27.6	7.3	18.8	6.4
新商品	29.9	35.7	24.8	32.5	14.2	20.3	9.8	14.5
ファッション	34.8	①67.8	14.2	④48.6	6.9	27.6	3.6	26.4
食べ物・料理	36.5	②63.4	29.3	①65.0	23.3	②57.3	22.3	②61.8
食べ歩き・グルメ	21.3	41.4	19.9	33.7	21.1	⑤40.7	10.7	26.4
芸能	25.8	④52.4	17.5	43.6	12.9	28.5	11.6	28.2
スポーツ	②54.9	19.8	①53.3	21.8	③53.9	26.0	④55.4	26.4
趣味	①55.3	39.6	④39.0	30.9	⑤34.5	38.2	31.3	40.0
美容	3.3	③60.4	1.2	⑤44.4	0	30.1	0.0	20.0
旅行	23.8	④50.7	26.4	37.9	34.9	③54.5	⑤47.3	④57.3
利殖・投資	2.0	0.9	6.5	4.1	6	4.5	8.9	4.5
住まい・インテリア	13.9	28.6	17.1	35.4	8.2	27.6	7.1	14.5
健康	18.0	39.2	26.0	③49.0	④41.4	①62.6	③67.0	①72.7
医療	14.3	22.0	12.2	26.3	22.8	32.5	40.2	⑤50.9
老後	5.7	10.6	9.8	16.0	28	34.6	42.0	③60.9
教育・育児	14.8	33.0	19.9	②54.3	9.1	9.3	4.5	4.5
環境・エコ	14.3	18.5	10.6	22.2	13.4	23.2	17.9	28.2
地域再生	4.1	2.6	4.9	2.5	5.2	5.3	7.1	8.2



5. こんなに違う日常生活意識の違い 買い物に対する意識・態度から見る

—買い物が「ストレス解消になる」という女性の心理の不可思議

ごく身近な日常生活での男女意識ギャップを「買い物行動」という視点から見てみよう。日常的で特に金銭にかかわる行動での男女意識の差は家庭生活や夫婦関係では衝突につながるケースとなることが多い。最も生活意識ギャップが大きいのは「買い物はストレス解消になる」で、男女ギャップ差は 31.7 ポイントである。続いては、「特売していると、すぐに必要がなくても買ってしまう」(ポイント差は 25.6)、「通信販売で買い物をしたことがある」(同 24.9)となっている。

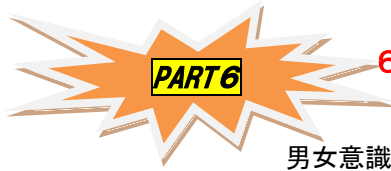
家計を預かり家庭生活を重視する女性と企業勤めを最優先する男性とは相容れないことが多い。男性にとって、特に「**買い物はストレス解消になる**」という女性の買い物心理には理解しがたいものがある。

◆買い物意識で男女差が大きい項目 (MA)

		男女差 ポイント	男性	女性
1位	買い物はストレス解消になる	31.7	14.5	46.2
2位	特売していると、すぐに必要がなくても買ってしまう	25.6	12.7	38.3
3位	通信販売で買い物をしたことがある	24.9	37.0	61.9
4位	タイムサービスがあると、つい買ってしまう	19.1	13.5	32.6
5位	ポイントやマイルージのつく店やサービスのほうを使う	17.4	21.6	39.0
6位	事前に買う商品をメモして買い物に行くことが多い	17.3	17.9	35.2
7位	買い物に行く回数を減らして、まとめ買いをする	16.7	6.5	23.2
8位	バーゲン品を買うことが多い	15.6	19.4	35.0
9位	買い物にはチラシを参考にする	13.8	31.3	45.1
10位	新しい商品が出ると試しに買ってみることもある	13.8	18.9	32.7

◆買い物に対する意識・態度 (MA)

男性ベスト 10			女性ベスト 10		
1位	何か買う時は現金を使うことが多い	50.8	1位	通信販売で買い物をしたことがある	61.9
2位	値段が安ければ無名メーカーのものでも買う	46.1	2位	何か買う時は現金を使うことが多い	56.9
3位	何か買う時はいろいろ比較して買うことが多い	41.3	3位	値段が安ければ無名メーカーのものでも買う	46.4
4位	通信販売で買い物をしたことがある	37.0	4位	買い物はストレス解消になる	46.2
5位	同じ買うのなら、高くても気に入ったものを買う	35.5	5位	買い物にはチラシを参考にする	45.1
6位	買い物にはチラシを参考にする	31.3	6位	何か買う時はいろいろ比較して買うことが多い	40.8
7位	何か買う時は、あらかじめ調べてから買う	29.9	7位	ポイントやマイルージのつく店やサービスを使う	39.0
8位	一流メーカー・一流ブランドの商品は信頼できる	26.0	8位	特売していると、すぐに必要がなくても買う	38.3
9位	極端に値段の安い商品は買わない	22.5	9位	事前に買う商品をメモして買い物に行く	35.2
10位	いつも同じメーカー・ブランドのものを買う	21.9	10位	バーゲン品を買うことが多い	35.0



6. 「老後にしたいこと」の男女ギャップを見る

—別離を想定して老後を考える女性と無頓着な男性たち

男女意識ギャップにおいて「老後についての考え方」においても大きな違いがある。

老後にしたいことは、男女ともに上位に「国内旅行に行きたい」「孫の成長を見守りたい」「海外旅行に行きたい」「夫婦2人の暮らしを、のんびり過ごしたい」となっているが、女性の老後への意欲は男性に比べると豊かでおおらかである。気になるのは男性が第二位に「夫婦2人の暮らしを、のんびり過ごす」という項目が上がってきていることだ。ぬれ落ち葉といわれる老人のイメージは男性自ら作り上げているのかもしれない。老後も「夫婦」を中心に考えてゆきたいという男性に対して、女性は老後こそ人生の再スタートの機会として個人として自律(自立)的に生きるという認識を持っているようだ。

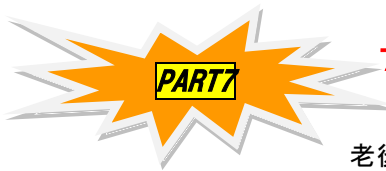
◆老後にしたいこと (MA) / 男女別上位ランキング 10 位 (20 歳以上のみ N=1660 / 男性:834、女性:825)

男性 / 老後にしたいことベスト 10			女性 / 老後にしたいことベスト 10		
1 位	国内旅行に行きたい	60.2	1 位	国内旅行に行きたい	65.3
2 位	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい	48.3	2 位	孫の成長を見守りたい	44.1
3 位	海外旅行に行きたい	41.7	3 位	海外旅行に行きたい	43.6
4 位	孫の成長を見守りたい	33.0	4 位	夫婦2人の暮らしを、のんびり過ごしたい	43.6
5 位	運動・スポーツをしたい	30.9	5 位	外食・グルメを楽しみたい	38.0
6 位	映画・演劇鑑賞を楽しみたい	27.5	6 位	映画・演劇鑑賞を楽しみたい	36.7
7 位	外食・グルメを楽しみたい	23.7	7 位	運動・スポーツをしたい	27.8
8 位	ウォーキング・トレッキングなどをしたい	18.8	8 位	ウォーキング・トレッキングなどをしたい	24.7
9 位	勉強・学問に取り組み、教養を身につけたい	13.4	9 位	ガーデニングを楽しみたい	23.0
10 位	ボランティア活動等、社会奉仕や地域活動をしたい	12.5	10 位	昔の友人を訪ねたい	16.5

◆老後にしたいことで「男女ギャップ」が大きい項目 (MA)

やりたいことがたくさんあり、老後に意欲的な女性たち

		男女ギャップ	男性	女性			男女ギャップ	男性	女性
1 位	外食・グルメを楽しみたい	14.3	23.7	38.0	11 位	今の仕事を続けたい	3.8	10.3	6.5
2 位	孫の成長を見守りたい	11.1	33.0	44.1	12 位	特にない	3.3	7.2	3.9
3 位	ガーデニングを楽しみたい	10.6	12.4	23.0	13 位	株取引や資産運用をしたい	3.2	5.4	2.2
4 位	映画・演劇鑑賞を楽しみたい	9.2	27.5	36.7	14 位	運動・スポーツをしたい	3.1	30.9	27.8
5 位	絵画・陶芸など芸術方面の趣味	6.4	9.2	15.6	15 位	若い世代と交流したい	3.1	6.2	9.3
6 位	ウォーキング・トレッキング	5.9	18.8	24.7	16 位	新しい友人をつくりたい	2.8	9.1	11.9
7 位	今と違う仕事がしたい	5.2	9.2	4.0	17 位	海外に長期滞在したい	2.5	7.3	9.8
8 位	国内旅行に行きたい	5.1	60.2	65.3	18 位	海外旅行に行きたい	1.9	41.7	43.6
9 位	夫婦2人の暮らしを、のんびり過ごす	4.7	48.3	43.6					
10 位	昔の友人を訪ねたい	4.3	12.2	16.5					



7. あなたが「よりどころ」とするものは何か？男女ギャップ

—男性は「配偶者」、女性は「子ども」と「友人」がよりどころ

老後にしたいことについて聞いたところ、女性が将来に対しかなり積極的なイメージを持っていることが明らかになったが、それでは現在も含め個人個人が「よりどころ」とするものは何なのかを聞いてみた。

- ・男性は、トップに配偶者(57.0%)をトップに挙げているのに対し、女性は「子ども」を挙げている。
- ・男性のトップの配偶者は、女性の「子ども」「友人(幼なじみを除く)」「親」を下回り第4位。
- ・親戚を含め家族をよりどころとする男女は多いが、家族の次には「趣味」をよりどころとするが上位を占める。
- ・この調査は未婚者もいることもあるためか、女性が「ペット」を第8位に、男性が第14位に挙げられている。

◆「よりどころ」とするものは／男女別

男性の「よりどころ」とするもの(MA)					
1位	配偶者	57.0	16位	ふるさと	7.5
2位	子ども	52.4	17位	近所、地元	6.6
3位	親	41.5	18位	学校	5.8
4位	友人(幼なじみを除く)	40.2	19位	インターネット(*)	5.3
5位	きょうだい	32.8	20位	貯蓄・資産	4.0
6位	趣味	29.7	21位	特にない	3.6
7位	趣味・スポーツの集まり	26.2	22位	病院・医師・看護師	3.2
8位	親戚	15.5	23位	お寺や教会など	3.0
9位	職場	14.3	24位	地域のコミュニティ	3.0
10位	自然	12.3	25位	各種相談所・役所・民生委員	0.9
11位	健康	12.1	26位	占い	0.2
12位	幼なじみ	12.0	27位	その他	0.0
13位	孫	11.6	(*)は、「インターネットのコミュニティ(mixiやブログ、ツイッター)」		
14位	ペット	10.6			
15位	恋人	9.1			

女性の「よりどころ」とするもの(MA)					
1位	子ども	62.9	16位	恋人	7.4
2位	友人(幼なじみを除く)	60.4	17位	ふるさと	6.6
3位	親	52.3	18位	貯蓄・資産	6.3
4位	配偶者	49.0	19位	インターネット(*)	5.8
5位	きょうだい	45.2	20位	病院・医師・看護師	5.1
6位	趣味	31.2	21位	学校	4.1
7位	趣味・スポーツの集まり	22.1	22位	お寺や教会など	3.7

8位	ペット	19.9	23位	占い	2.6
9位	幼なじみ	18.6	24位	地域のコミュニティ	2.3
10位	健康	17.2	25位	特になし	2.1
11位	孫	16.8	26位	各種相談所・役所・民生委員	1.0
12位	自然	14.8	27位	その他	0.0
13位	親戚	14.7	(*)は、「インターネットのコミュニティ(mixiやブログ、ツイッター)」		
14位	近所、地元	11.7			
15位	職場	10.6			

◆「よりどころ」の男女ギャップが大きい事柄/上位10項目 (5ポイント差以上の項目)

		男性	女性	男女差ポイント
1位	友人(幼なじみを除く)	40.2	60.4	20.2
2位	きょうだい	32.8	45.2	12.4
3位	親	41.5	52.3	10.8
4位	子ども	52.4	62.9	10.5
5位	ペット	10.6	19.9	9.3
6位	配偶者	57.0	49.0	8.0
7位	幼なじみ	12.0	18.6	6.6
8位	孫	11.6	16.8	5.2
9位	近所、地元	6.6	11.7	5.1
10位	健康	12.1	17.2	5.1

◆「配偶者」「子ども」「ペット」をよりどころとするその差異/男女別・年齢別でみる

	配偶者をよりどころ			子どもをよりどころ			ペットをよりどころ		
	男性	女性	ポイント差	男性	女性	ポイント差	男性	女性	ポイント差
計	57.0	49.0	8.0	52.4	62.9	10.5	10.6	19.9	9.3
20~34歳	23.0	25.1	2.1	17.2	29.5	12.3	12.3	24.2	11.9
35~49歳	72.4	63.0	9.4	71.1	81.1	10.0	9.8	12.8	3.0
50~64歳	82.8	67.1	15.7	74.6	82.5	7.9	11.6	24.0	12.4
65~74歳	80.4	57.3	23.1	74.1	85.5	11.4	8.9	12.7	3.8

本レポートは「男女の生活意識のギャップ」をテーマとしたが、
男女ギャップと大きくかかわる「離婚」についての最近の状況を整理しておく

参考レポート：日本の最近の離婚状況

離婚肯定派が上回る時代になった

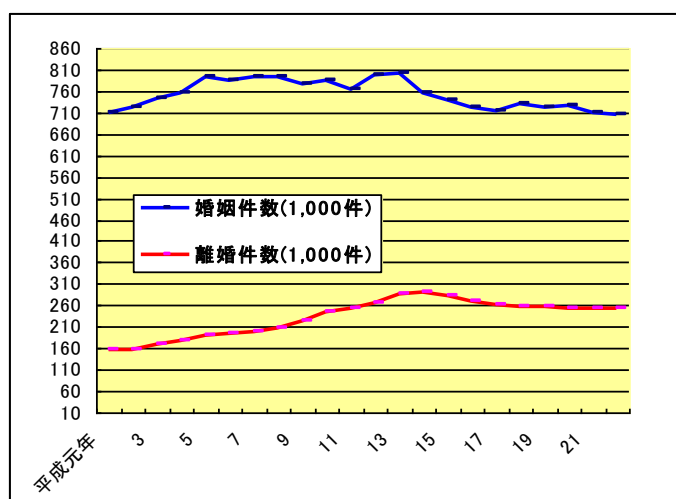
- ◇毎年 25 万組の離婚件数が続く、「2 分に 1 組」が離婚へ
- ◇離婚理由は「性格の不一致」、自己中心の生活へ

▼毎年 25 万組の離婚件数が続く

生労働省が 2011 年 1 月に発表したデータによれば、離婚件数は昨年につき横這いの約 25 万 1000 組(速報値)で約 2 分に 1 組の割合で夫婦が離婚している。

この数字の意味するところは、一つは平成 11 年以降 10 年以上も毎年 25 万組以上の離婚件数があること、もうひとつは、長期に見て、結婚するカップルは減っているのに比べて、離婚する夫婦は増えているということである。離婚相談所にかける人を含めたら、離婚について悩んでいる人はかなりの人数になることと同時に、日本の核家族世帯が減りはじめ、母子や父子世帯が増加傾向もあり、離婚件数は人口動態の中では高位水準を保つことが予測される。

▼離婚件数は、多少の増減はあるものの伸び続けている



▼2 分間に 1 組が離婚しています！それが現実だ。増える離婚肯定派

離婚に対する考え方は、2005 年内閣府「国民生活選好調査度」によれば、男女で大きく異なり、女性は離婚に対して肯定的、男性は否定的という傾向がある。女性はどの年齢層においても離婚肯定派が否定派を上回り、男性はどの年齢層も離婚否定派が離婚肯定派を上回っています。特に 45-49 歳の年齢層が顕著で、女性の当該年齢層は肯定派が否定派を最も上回っており、男性の当該年齢層は、否定派が肯定派を 2 番目に上回っているという実態があります。また、熟年結婚が熟年夫婦による離婚の数値を押し上げている。

また、昭和 25 年以降の離婚の種類別構成割合の年次推移をみると、協議離婚の割合は 25 年の 95.5%から 37 年の 90.7%まで低下している。それ以降は 90%前後で推移していたが、平成 15 年以降低下し、20 年は 87.8%となっている。一方、平成 16 年からできた和解離婚は毎年上昇している。

▼夫婦が離婚を考える理由「TOP3」

実際に離婚をするとなると、子どものことやお金のこと、離婚後の生活のことなど、クリアにしなければならない問題が次々と迫ってくるのが現実。しかしあえて離婚を選択(決意)しているような気配もある。

離婚の原因は、男女によってのその離婚理由は大きく異なる

■妻側から聞いた離婚の理由	■夫側から聞いた離婚の理由
1位: 性格や価値観の不一致	1位: 性格や価値観の不一致
2位: 家庭内暴力(DV)	2位: 異性関係(自分もしくは妻の浮気)
3位: 異性関係(夫もしくは自分の浮気)	3位: 家族や親族の問題

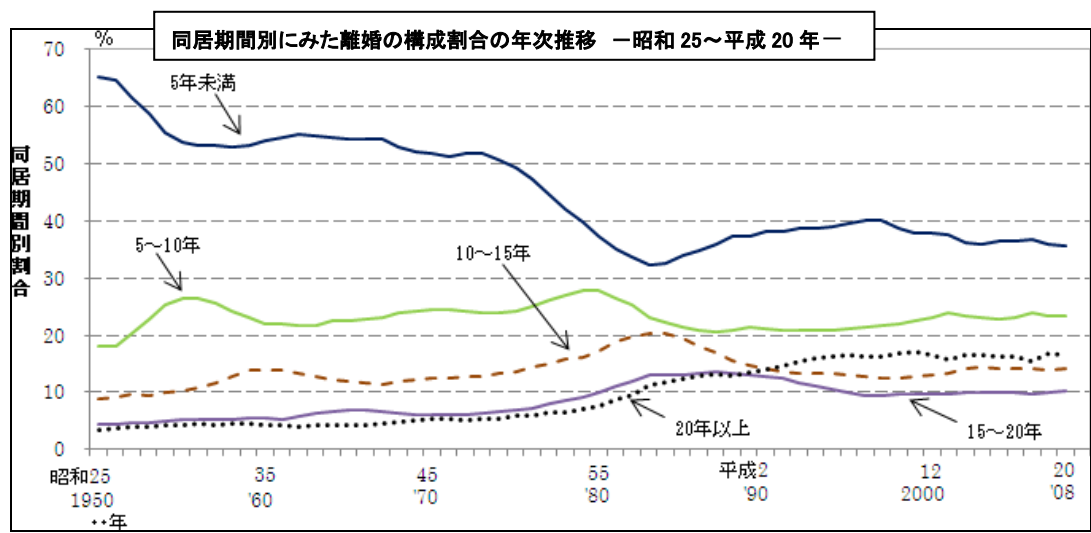
このほかにも最近では、家庭内暴力(DV)により自分自身・家族の身に危険が及ぶ場合が増えているが、「夫が生活費を渡さない」「妻の浪費癖」「セックスに関する不満や問題」「子どもの教育に対する意見の相違」などが多いが、「性格や価値観の不一致」が離婚原因のトップとなる。

◆現代の離婚の原因の主なものは「性格の不一致」であるが…。

全離婚原因のうち男性の60%以上、女性の40%以上の離婚理由が性格の不一致である。様々な意味を含む理由であり、便利な理由である。性格の不一致には有責性が存在しないからだ。有責性が存在する離婚の場合、不倫や浮気などの問題が原因として存在しているので、その問題さえ乗り越えることができれば離婚にはいたらない可能性も考えられる。しかし、性格の不一致は言ってしまうと「ウマが合わない」という表現に近いので、どうしようもない、仕方が無いという事になる。であるから多くのカップルが性格の不一致を理由とし、離婚しているという背景もある。協議離婚で処理できない場合、調停(家庭裁判所)で話し合いの場を持つ事になる。

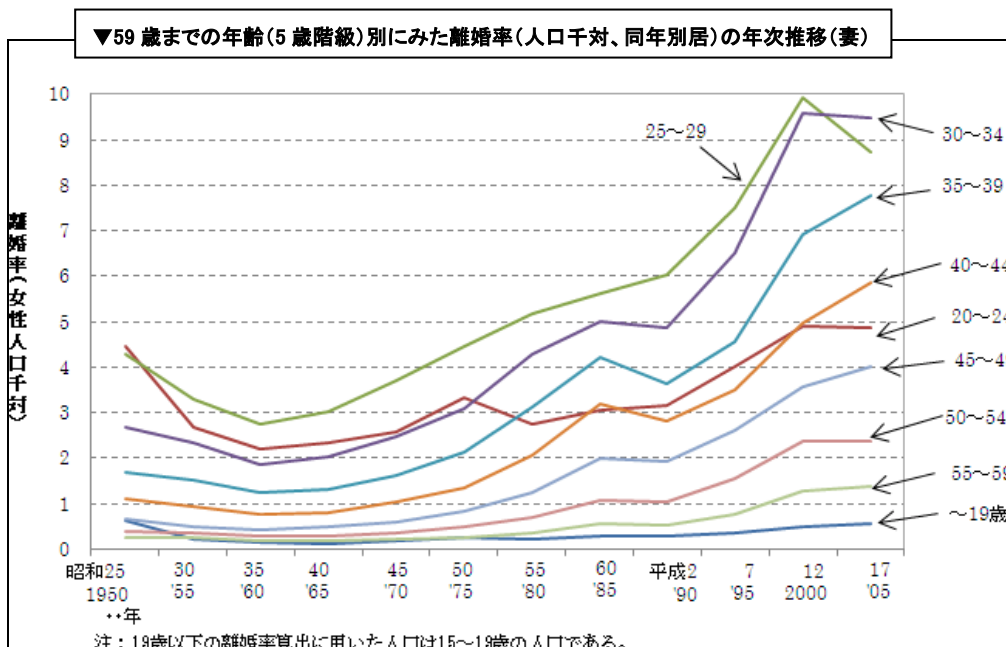
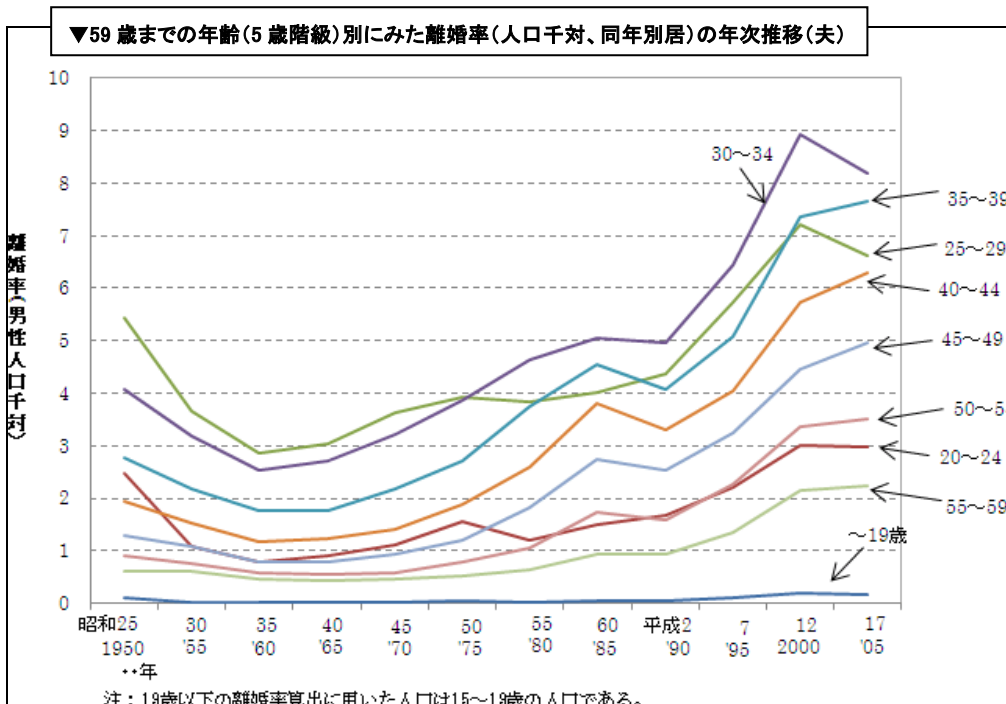
▼最近離婚する人は同居期間の長短は関係なし

昭和25年以降の離婚の同居期間別構成割合の年次推移をみると、同居期間が5年未満の割合は、昭和25年から低下傾向にあり、昭和58年の32.2%まで低下した後、上昇傾向に転じたが、平成8・9年の40.1%をピークに再び低下傾向となっている。一方、同居期間が20年以上の割合は、平成11年まで上昇傾向にあり、その後、若干増減し、平成20年には16.5%となっている。



▼年齢階級別離婚率を見ると男女ともに「30～34歳」が最も高くなっている

昭和25年以降の59歳までの年齢階級別離婚率(人口千対)の年次推移を5年ごとにみると、夫妻ともどの年齢階級も上昇傾向で推移している。夫は昭和55年以降30～34歳が最も高くなっており、妻は平成12年までは25～29歳までが最も高かったが、17年には30～34歳が最も高くなっている。



まとめ執筆者メモ

芸能人やタレント、あるいはスポーツ選手の結婚話や離婚話は楽しく見せてもらうが、自分の周辺の第二の人生、第三の人生のスタートを前にした団塊世代夫婦の離婚話にはついていけないことが多い。そこにはどうも底知れぬ男女の生活意識のギャップをみてしまうからだ。誰もがうすうす気づいている。もはや昔ながらの「結婚像」は失われたと。

それでも結婚という制度は存続しているわけで、なんだかよくわからないものに対して焦ったり、悩んだりする。やっぱり「現状を何とかしなくてはならない」と思うから、既婚者でも未婚者でもその相手と相互理解に努めているようだが、なぜか「性格の不一致」という名のもとで離婚が成立する。性格の不一致が確認できればそれを「てこ」に歩み寄るとするのがルールなのだと思うがそうはいかないらしい。この分析レポートではっきりわかったことは、「男女の生活意識」には大きなギャップが存在するということだ。

夫婦は「互いの生活を互いに本当に知らない！」と言うこと。夫と妻の生活を入れ替えてみたらどうなるか。夫の勤める会社で夫はどのようなことを期待され何をしているのか？夫が勤める会社で起こる出来事にどのように対応しているのか。逆に、妻は炊事・洗濯・育児・教育、近所付き合いにどれだけの時間と金銭と思いをかけているのか？。買い物のノウハウ・献立など、そこには独自の技術がある。つまり、妻も夫も個別に「社会」への窓口を持っているわけだ。

「主婦なんて、遊んでいるようなものだ。」「外で好きなことができて、いいわね。」と、互いに相手の暮らしを知っていると錯覚している。大切なのは、「本当に知らない！」ということを知ること。つまり男女の生活意識ギャップはいたる生活シーンに見え隠れする。言うまでもなく、夫婦は2人の個人によって成り立つ。夫婦になったからといって、「個人ではなくなった」ということではない。夫婦になると、夫婦としての生活になるが、個人としての領域もある。夫婦関係に不満を持つケースとして多いのが、この「夫婦の領域」と「個人の領域」の取り扱いの難しさかもしれない。夫婦関係であることに”過大なサービスを求めるものではない”。個人領域の不足を、夫婦関係で穴埋めしてもらおうと期待すると、夫婦関係はととも残念なものになり、「夫婦の領域」と「個人の領域」のどちらか一つに絞ると、夫婦というシステムは壊れる。

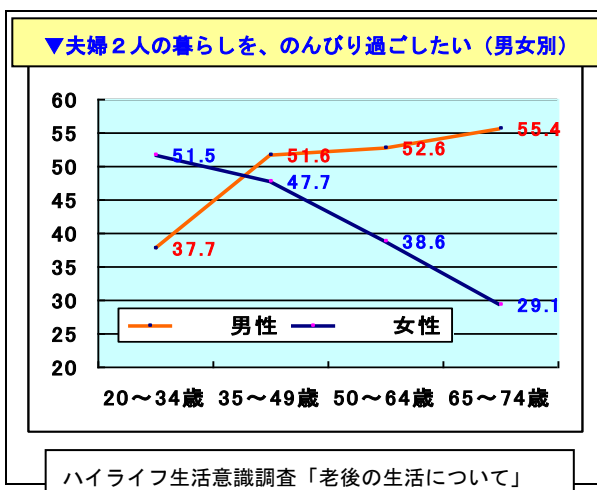
本レポート分析で気になったことは二つ。

ひとつは「老後の生活」についての質問で、「夫婦2人の暮らしを、のんびり過ごしたい」とする男女の回答だ。男性は年齢を重ねるにつれその回答率(右グラフ)は高まり「35～49歳」の段階で50%を超えるが、女性はその年齢層から低い回答へと転換し、65歳以上になると25%となる。確かに女性の寿命は男性より約10歳ほど長く、いつまで配偶者と過ごすというわけには行かないことはわかるが・・・。

もうひとつは、「よりどころ」は何かという回答だ。現状では「配偶者」「子ども」「親」などが高回答項目として上がるが、高齢少子化がさらに進行すれば未婚者は増え続け、生涯未婚率が高まり、子供のいない家族も増える。いまでも「家族」より「ペット」をよりどころとする人も多い。

10年以内に、結婚像が失われ人々が右往左往する社会＝本格的な「ロス婚」(ロスコン=Lost Marriage) に突入するのではないかと

世界最速の少子高齢社会大国である日本の社会では人間力(相互理解と相互尊重能力)が問われる。



以上 第四回分析レポート